

A-1 最終報告書【10万円枠(2023年3月6日締切)／30万円枠(2024年3月6日締切)】

第13回ユネスコスクールSDGsアシストプロジェクト

助成金利用報告書 (申請年度：2021年度、実施年度：2022年度～)

学校名	特定非営利活動法人横浜シュタイナー学園
助成プロジェクト名	循環型社会理解の基礎となる体験型「暮らしと仕事」学習プロジェクト
主な教科領域等	教科領域 (国語・算数・理科・生活・社会・家庭)
キーワード ※複数回答可	環境学習、国際理解、平和・人権、世界遺産・地域遺産学習、防災・減災教育、気候変動、その他 ()
助成活動に参加した生徒数	第3学年 16人
その他の参加者数	地域住民・保護者 (20人) その他 (近隣のNPOほか15名)
助成活動期間	2022年4月1日～2023年3月31日

※以下、文字制限はありませんので、具体的な活動の様子や成果が分かるように、記入してください。

■助成活動の目的・ねらい

横浜シュタイナー学園の9年間にわたるESD/SDGs学習の土台となる、3年生・4年生の総合カリキュラム「暮らしと仕事」を継続プロジェクトと位置づけて取り組んでいます。人の生活の根幹となる、牧畜、農、手工芸、土木・建築を全身で体験し、地元につながる広大な里山に保全されている循環型社会との結び付きにおいて学ぶことで、高学年の全世界的な視野の学びの土台をしっかりと築くことがねらいです。

■助成活動内容

今年も「暮らしと仕事」の学びを、生活を支える道具をフェルトによって手作りするところから始めました。羊の毛の刈り取りは、いつものように子どもの国にある雪印こどもの国牧場教育ファームにお世話になりました。平成22年に発生した口蹄疫の影響で、見学のみが続いていますが、目の前でもこの羊の毛がみるみる刈られていく様子に、子どもたちは釘付けになっていました。

(今回、この体験費を助成していただきました)

刈り取られた羊毛は、堆肥化された牛糞とともに持ち帰り、洗浄、脱脂、カーディングなどの工程を教室で体験しました。その上で、石けん水をかけながらこすりあわせてフェルト化し、後に家づくりにつながる長さの学びで使い始めた30cmの竹の物差しに入れ物に仕上げました。残った羊毛は、今後、動物学の学びでつくる動物のぬいぐるみやピンクッションの詰め物として使う予定です。

いただいた牛糞堆肥は、校庭に耕した畑での野菜づくりに用いました。

農耕の学びでは、校庭の畑づくりのほかに、校舎の大家さんの耕作地でのサツマイモづくりのほか、近隣の森の谷戸田をお借りして、稲作を行いました。稲作では、いはる里山交流センターのご支援をいただき、田植え、草取り、花の観察、稲刈り、稲こき、脱穀をすべて体験し、横浜市が管理している古民家の釜屋で炊飯しておいしく食しました。

また、新治市民の森愛護会のご協力により、森のなかの竹林から立派な孟宗竹を切り出ささせていただきました。これは、「暮らしと仕事」でいちばんの大事業である、家づくりのための材料となります。子どもたちはヘルメットと手袋を着用し、安全についての説明を受けた後、空に届くような太い孟宗竹にのこぎりで切り込みを入れて、倒しました。そして、それを切り分け、軽トラックに乗せるまでを体験しました。この切り出しは、竹林の密度を適度に保つ保全活動にもつながっています。

今年の家づくりでは、竪穴式住居づくりに取り組みました。子どもたちは、大塚・歳勝土遺跡公園で本物の竪穴式住居を見学し、やる気満々で戻りました。縦穴を深く掘り下げる作業の一部は保護者

も手伝いましたが、家づくりのほとんどの行程は子どもたちだけでやり遂げました。屋根には、収穫した稲わらを使い、農を中心とした循環の学びにもつながりました。毎日毎日、子どもたちが家づくりに集中する熱量は、担任も驚くほどで、「ガテン系クラス」という言葉が飛び出すほどでした。家は「やすらぎの家」と名付け、お世話になった市民の森愛護会の皆さんや保護者にも集まっていただき、お披露目をしました。

(今回は、家づくりに使用するホールディガー、高所作業用三脚、ノミの購入費を助成していただきました。ホールディガーは畑の土壌改良にも利用します。また、高所作業用三脚は校庭の樹木の剪定作業や、横浜シュタイナー学園が結成している横浜市十日市場西田公園愛護会の公園保全作業にも使わせていただいております。)

その他、デザイン家具づくりの工房を立ち上げた卒業生から、家具づくりの話聞くなど、自分たちの手から紡ぎ出される生活の全体像を、3年生は体感的につかみ取った1年となりました。

■成果①児童生徒にとって、具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力を身につけたか。

今年の学びの最大の収穫は、子どもたちが自らの手を使って生活を生み出していくことの喜びに、全身全霊でひたることができたことです。今年度の3年生は、新型コロナウイルス感染症が広がった年に入学した子どもたちで、入学式を含め、多くのことを制限されてきたクラスです。校外学習にふんだんに時間を使い、家づくりでも毎日のように屋外活動で身体を動かした1年間は開放感に満ちて、子どもたちの心と身体を解き放つ好機となりました。

この「暮らしと仕事」のカリキュラムは、9才という心身の転換点に立つ子どもたちの支柱となる、タイムリーな学びです。発達の差異や特性の違いなど、多様なバックグラウンドをもつ子どもたちが増える中で、ともに身体と手を動かし、ひとつの目的に向かって力をあわせる活動は、クラスのハーモニーを生み出す助けにもつながるものです。

■成果②教師や保護者、地域、関係機関等に対するインパクト(例えば、発表会を通じて、保護者への啓発にもつながった等)

今年は、堅穴式住居ということで、深い穴を大きく掘り下げていく作業では、お父さんたちの力添えが必要で、お父さんのよき参加機会となったと思います。自分たちも関わっただけに、完成した本格的な堅穴式住居のたたくまいに、保護者も感無量でした。

今年の担任は、2005年の開校からクラスをもってきたベテランですが、クラスの担当のタイミングが里山の活用とかみ合わず、今回の3年生で初めて、にいほる里山交流センターや新治市民の森愛護会の方々の協力の下に、竹林、水田、古民家をフルに使って校外活動を行いました。他の教員からその素晴らしさについて報告を受けていたけれど、自分が実際に使ってみて、その自然の豊かさ、生活と自然の共生のあり方、そして自然と人の生活の調和の中で資源が循環していくことを実感でき、その豊かさに圧倒されたとのことでした。

この土地を活動の地にできた幸運に感謝するとともに、巨大都市横浜に残された貴重な環境の保全に、学園としても力を注いでいます。

■自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

3年生の家づくりは、毎年、クラス担任が独自の構想を巡らしてユニークな家を建てていますが、

今年の担任は毎回、竪穴式住居を建てることに決めていました。地面を掘り下げて周囲に盛り土をする作業の面白さ、シンプルな構造美、稲わらの再利用ができること、完成時の圧倒的な存在感とともに、6年生で始まる日本史の下地となる体験として優れたモチーフだと考えられます。

最初は「二階建ての家がいい！」などと言っていた3年生ですが、百聞は一見にしかずと訪問した大塚・歳勝土遺跡公園の竪穴式住居にたちまち子どもたちは魅了され、「これしかない」という意気込みで家づくりをやり通すことができました。

■今後の改善に向けた方策や展望

横浜シュタイナー学園の活動としてすっかり定着したプロジェクトですが、高学年の学びへのつながりなどもしっかり考察した上で、意識的に構築していけたらと考えています。来年度のユネスコスクールとしてのメインプロジェクトです。